

興福寺北円堂院の調査

—第483次

1 調査の概要

興福寺では、「興福寺境内整備基本構想」(1998年)に基づき、寺観の復原・整備が進められている。この整備事業にともない、1998年以来中金堂院や南大門などの発掘調査を継続しておこなっている。本調査もその一環として、遺跡整備のため北円堂周辺の遺構の確認を目的としておこなった。調査区は、北円堂の外周をめぐる回廊と南門を対象とし、調査可能である南面回廊・東面回廊のほぼ全域と、北面回廊中央部に設定した(図205)。調査面積は676㎡、調査期間は2011年7月1日から10月11日までである。(大林 潤)

2 北円堂院の歴史と既往の調査

北円堂院は元明太上天皇・元正天皇が藤原不比等の供養のため長屋王に命じて造営したものであり、不比等の一周忌にあたる養老5年(721)8月の竣工(=創建)と伝えられる(『扶桑略記』『興福寺流記』)。その前年に「造

興福寺仏殿司」が置かれているが(『続日本紀』)、これを北円堂院造営のためとみる説もある。北円堂院の中心は八角円堂の北円堂であり、内部には本尊の弥勒仏像をはじめとする諸像が安置され、また周囲に単廊の回廊を巡らせ院を構成していた。

興福寺はその歴史のなかで幾度か大規模な火災を被ってきたが、その最初のものが永承元年(1046)の火災である。伽藍のほとんどが失われたが、北円堂と正倉院のみは災禍を免れる。しかしその3年後、永承4年(1049)に北円堂は唐院・伝法院とともに焼失する(以上『扶桑略記』)。復興(=再建)は寛治6年(1092)まで降るが(『為房卿記』『中右記』)、これは康平3年(1060)に諸堂が再び焼亡したためと考えられる(『康平記』)。

治承4年(1180)、平重衡の南都焼討により興福寺は伽藍のほぼ全域を焼失するが、北円堂もその例外ではなかった。翌年には造興福寺行事官が任命されるなど復興体制は迅速に整えられるが(以上『玉葉』)、優先されたのは講堂・金堂・南円堂などであり(『養和元年記』)、北円堂の造営はやや遅れることとなる。建永2年(承元元年=1207)に興福寺より北円堂院再興を願う勧進状が提出され(『弥勒如来感応抄』)、翌年には安置仏の造立が開始された(『猪隈関白記』)。承元4年(1210)には宝形(露盤宝珠)を据え上棟に擬したとの記録があり(『承元四年具注曆裏書』)、北円堂はここら完成したとみられる(=再々建)。これが現在の北円堂であり、興福寺では三重塔とならび現存最古の建造物となる。

ただし回廊については、創建・再建両時の北円堂に付設されたことは諸史料より確認され(『興福寺流記』『為房卿記』など)、また再々建時も造営自体は企図されたが(『弥勒如来感応抄』)、実際に完成したかはあきらかでない。現在の北円堂に回廊は付属せず、また寛政3年(1791)の『大和名所図会』に描かれないことから、江戸時代後半の時点で回廊が存在しなかったことはほぼ確実である。しかし、それ以前の状況は不明とせざるをえない。

北円堂院ではこれまで、北円堂解体修理時の1963年と防災施設工事時の1975・1977年に、部分的な発掘調査がおこなわれている(以下、後者を防災調査とする)。とりわけ防災調査では、西面回廊の礎石や西面および北面の基壇外装(地覆石・羽目石)、東面回廊の基壇土を確認するなどの成果を挙げている。(山本祥隆)

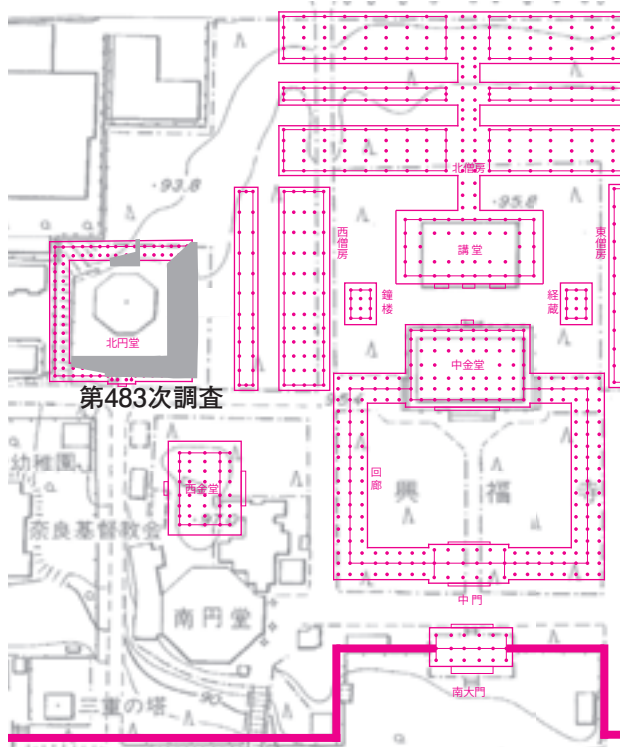


図205 第483次調査区位置図 1:2500

3 基本層序と検出遺構

地形と基本層序

調査開始前の調査地の地形はほぼ平坦である。南面には興福寺境内から西の商店街へ抜ける道路があり、西に大きく傾斜している。北面、西面は崖状になっており、調査地の西半分は盛土によって造成されている。

基本層序は以下のとおりである。調査区東半は、厚さ0.2m程度の表土を取り除くと礫を多量に含む砂質の地山層があり、この上面が遺構検出面となる。南面回廊の中央部から西にかけては、この地山面が西に向かって大きく落ち込んでおり、その上に黄褐色砂質土・粘質土を積み上げた整地土がのり、この上面が遺構検出面である。調査区北辺も盛土によって造成されており、約2mほど掘り下げたが、地山は確認できなかった。

南 門

南門SB9940 南面回廊の中央、北円堂の正面に開く門。遺構の大半は削平により失われており、わずかに北東隅および北西隅で、基壇土の範囲と基壇外装の抜取溝を確認した。

基壇土は地山を削り出した上に黄褐色の粘質土を積むが、積土を確認したのは遺構の東部3分の1程度のみで、他は削平されていた。基壇北東部では、直角に曲がる地覆抜取溝を確認した。抜取溝は2時期分で、内側に深さ0.2mの溝SD9941A、外側に深さ0.2m、幅0.3mの溝SD9941Bがあり、基壇外装の改修があったことがわかる。地覆石などの石材は残存していない。また基壇上面で、礎石の痕跡などは確認できなかった。

この抜取溝の隅部を南面回廊の推定中軸線で折り返すと、基壇規模は南北8.1m(27尺)、東西10.9m(37尺)となる。

回 廊

北円堂院の回廊は単廊で、基壇は地山を削り出し、地山の低い北部や南西部では盛土を施した上で黄褐色粘質土の基壇土をのせて造成している。南門西半以西は削平

のため遺構は確認できなかったが、それ以外の調査区内のほぼ全域で南面・東面・北面回廊の基壇土、外装抜取溝、礎石据付・抜取穴などを確認した。

南面回廊SC9945 南門の東側で、北側の基壇外装抜取溝と礎石抜取穴を確認した(図206)。

基壇外装抜取溝SD9946は、南門と同じく2時期分を確認した。古い方の溝SD9946Aがやや内側にあり、改修後の溝SD9946Bには地覆石とみられる凝灰岩が残存する。なお、南門の西側にも、凝灰岩切石列が残存するが、基壇外装想定位置よりも北にずれ、基壇土の外側の土層に含まれることから、回廊基壇外装の石材を後世に再利用して並べたものと判断した。

瓦溜SX9947は、基壇外装抜取溝SD9946Bを覆う溝状の遺構で、多量の瓦片が含まれる。幅は南北1.2m。後述する東面回廊でも同様の瓦溜を確認している。

礎石据付痕跡は、東南隅の1間分を除くと、北側柱列で3基、南側柱列で1基確認した。柱間寸法は、桁行3.0m(10尺)、梁行3.3m(11尺)である。いずれも残存状態は非常に悪く、底の数cm程度がかるうじて確認できる程度であった。礎石や根石などは残存していなかった。

基壇縁南辺が調査区外であるため正確な数値は不明だが、中軸で折り返すと、基壇幅は6.6m(22尺)となる。

東面回廊SC9950 東面回廊に関わる遺構は、基壇土、基壇外装および基壇外装抜取溝、礎石据付・抜取穴を確認した(図207・209・210)。

基壇外装は、東西両側で部分的に凝灰岩の地覆石が残存しており、それ以外の部分では地覆石の抜取溝SD9951B(西側)・SD9952B(東側)を検出した。また、南門・

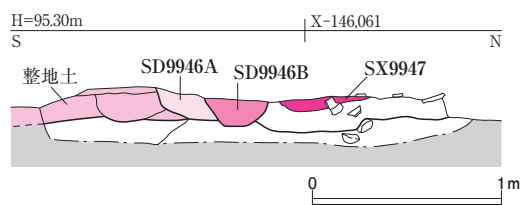


図206 南面回廊基壇外装抜取溝SD9946断面図 1:40

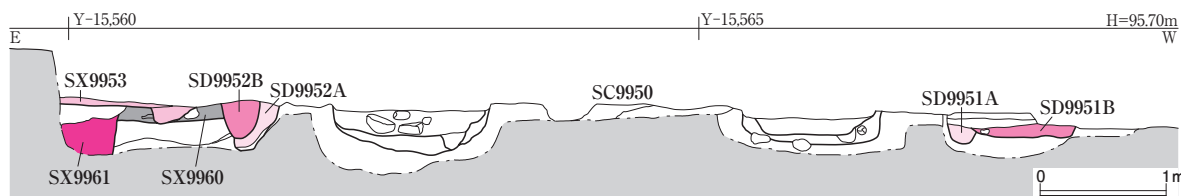


図207 東面回廊SC9950断面図 1:60

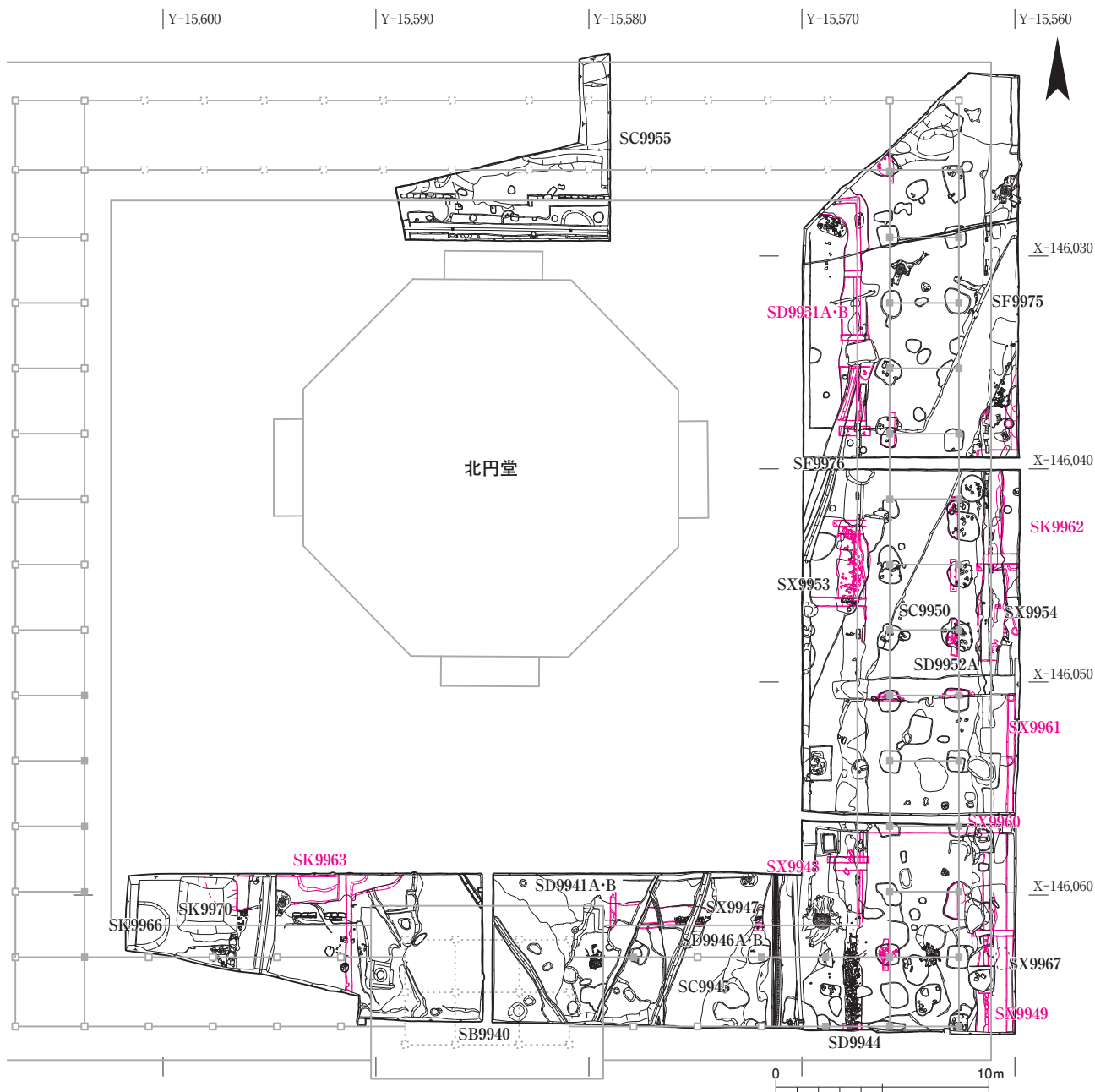


図208 第483次調査遺構平面図 1:300

南面回廊と同じく、先行する地覆石抜取溝SD9951A・SD9952Aを確認しており、検出した地覆石は造営当初のものではなく、改修後の遺構であることがわかる。SD9951A・SD9952AはSD9951B・SD9952Bよりも1石分内側にあり、それぞれの東西幅は6.2m・5.8mとなる。西側の抜取溝SD9951Bは調査区の北端で直角に西に曲がり、ここが回廊の東北の入隅であることがわかる。

基壇の上面では、回廊側柱礎石据付・抜取穴を検出した。南端を含めて南北13間となるが、もっとも北の柱穴は後世の攪乱により破壊されており確認できなかった。柱間寸法は、梁行3.3m（11尺）、桁行は南端が3.3m（11尺）で、それ以外は2.9～3.3mと均一ではない。礎石据付穴は一辺1.1mの隅丸方形で、5～20cmの根石が残存するが、礎石そのものは失われている。埋土には遺物がほと

んど含まれておらず、据付・抜取の年代は不明である。また、礎石据付の改修痕跡は認められなかった。

基壇外装抜取溝の上面には焼土面SX9960およびそれを覆う炭層があり、その上に鎌倉時代の軒瓦を含む溝状の瓦溜SX9953（西側）・SX9954（東側）がのる。SX9960は東面回廊の東側では顕著であったが、西側では確認できなかった。この焼土面SX9960は、残存する地覆石上面と同じレベルで回廊の内側にも広がっており、外装抜取溝SD9952BはSX9960を掘り込んでいた。すなわち、基壇外装の上部（羽目石以上）がすでに失われていた状態で火事などで周囲が焼け、その後地覆石を抜き取っていることがわかる。瓦溜SX9954はこの抜取溝SD9952Bを覆うように広がっている点が注目される。

北面回廊SC9955 北面回廊の南端基壇外装は防災調査で



図209 東面回廊SC9950（北から）



図210 東面回廊SC9950西面基壇外装検出状況（北から）

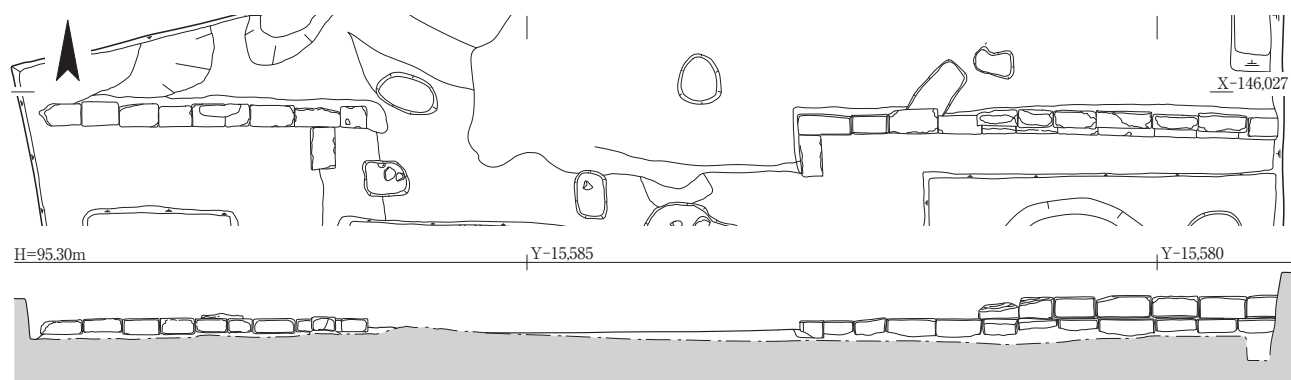


図211 北面回廊SC9955基壇外装平面図・立面図 1:60

確認されており、今回はそれを再確認した。柱穴および北辺の遺構は削平のため確認できなかった。

基壇は、多量の盛土の上に粘質土と砂質土を積み造成するが、版築というほどの明瞭な層はなさない。

基壇外装は、凝灰岩の地覆石と羽目石が良好な状態で残存し、中央部に回廊内側への階段の地覆石が突出する。地覆石は幅15～20cm、成10～15cm、長さ20～40cmで、その上に幅12～15cm、成18cm、長さ28～43cmの羽目石を並べる（図211）。葛石や束石は確認できなかった。階段部分は地覆石が1石ずつ残存する。地覆石の心々間寸法は3.9m（13尺）である。

回廊の規模 以上の回廊の検出状況より、遺構全体の規模を確認する。防災調査で確認された遺構と合わせると、回廊の規模は南北43.5m（147尺）、東西44.3m（150尺）、梁行3.3m（11尺）となり、『興福寺流記』に記された回廊の規模と一致する。

暗渠SD9944 回廊東南隅部で検出した南北方向の瓦積溝。回廊内の排水のために設けられた暗渠である（図

212）。暗渠の幅は0.2mで、底面に河原石を並べ、側面は平瓦を丁寧に平積みする。断割調査の結果、現在の瓦積の外側に古い抜取溝があり、造営当初の暗渠は内法幅が現在よりも広く、その後幅を狭めて瓦積に改修したことがあきらかとなった。当初はおそらく側面も石積だったものと考えられる。回廊内側の雨落溝からの水を受けていたとみられるが、雨落溝自体は検出していない。

その他の遺構

磔敷舗装面SX9948 東面回廊SC9950の内（西）側で検出した磔敷面。径3cm前後の磔を敷いた舗装面で、回廊内庭部の舗装とみられる。

磔敷舗装面SX9949 東面回廊外（東）側で検出した磔敷面（図213）。径1cm程度の小磔を敷き詰めて舗装している。回廊の外側のある一定範囲の舗装を示す。この磔敷は地覆石東際から広がっており、基壇外装の外側に雨落溝が設けられていなかったことがわかる。

土坑SK9962 東面回廊中央部の東側で検出した落ち込み。焼土面SX9960を掘り込み、瓦溜SX9954に覆われる。

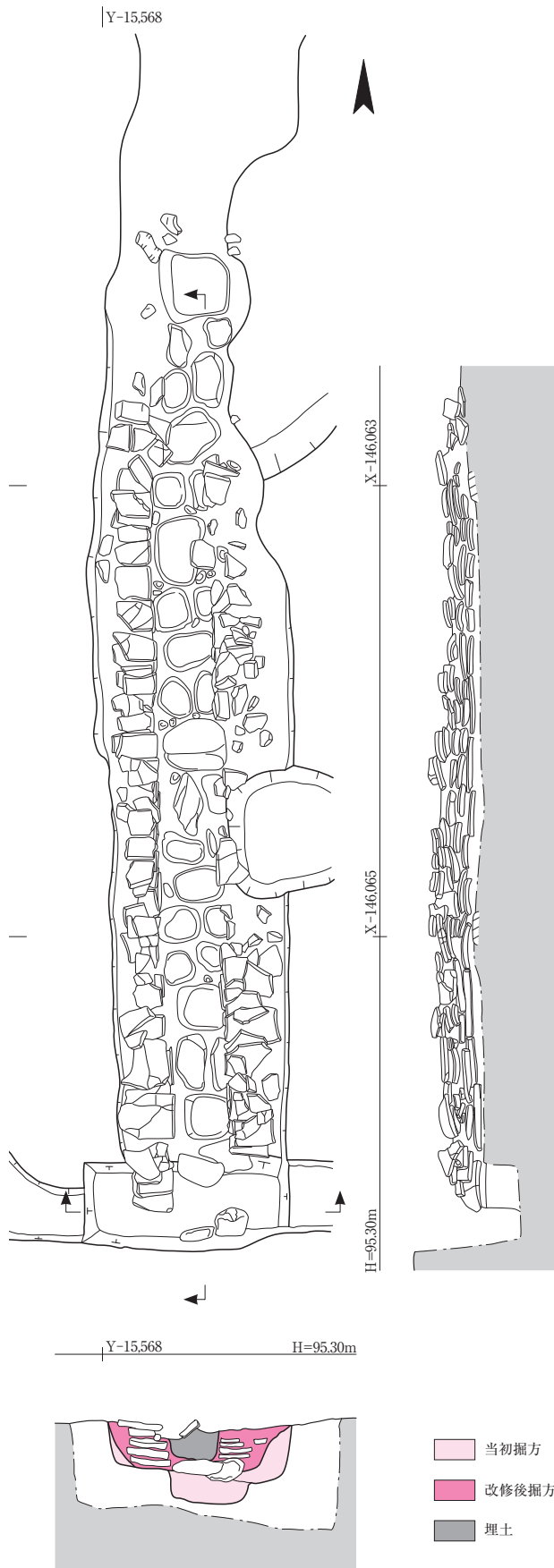


図212 暗渠SD9944遺構平面図・立面図・断面図 1:30



図213 礫敷面SX9949（北東から）

調査区内では西辺を検出したのみで、大半は調査区の東側に広がるとみられる。

土坑SK9963 南門SB9940の北西で検出した。埋土に多量の瓦を含む。瓦の年代が平安時代を下限とすることから、治承焼討後の整地の際に不要となった瓦を投棄したと考えられる。

南北柱穴列SA9961 東面回廊の東で検出した南北柱穴列。直径40cmの円形の柱穴7基を確認した。柱間寸法は3.0～3.4m。瓦溜SX9954を掘り込む。年代は不明だが、配置より回廊解体にともなう足場穴の可能性もある。

土器溜SX9967 東面回廊東側瓦溜SX9954を覆う暗褐色土層上で検出した。室町時代の土器片を含む。

土坑SK9966 調査区西端で検出した直径2.3mの土坑。埋土から近世の土器・陶磁器・瓦が出土した。

近世道路SF9975・9976 SF9975は北円堂の東側を北東から南西に通る道、SF9976はSF9975から北円堂東面階段へ至る東西方向の道である。幅は約2.4mで、回廊基壇土を掘り込んで設けられている。路面は小礫を敷き詰め上面を叩き舗装する。『大和名所図会』に描かれる道路と一致することから、江戸時代後半にはすでに設けられていたとみられる。

土坑SK9970 調査区西端で検出した大土坑。平面は2.4m×2.7mの矩形で、深さは2.6m。壁面を厚さ3～5cmの粘土で塗り固めていた。埋土には現代のごみが大量に投棄されており、最終的にはごみ穴として埋め立てられている。興福寺長老の話によると、第二次世界大戦中、北円堂周辺に防空壕があったといい、この土坑がその遺構である可能性がある。

（大林）

4 出土遺物

土 器

北円堂院回廊出土の土器は、整理箱で31箱ある。大多数は回廊の基壇が削平された後に堆積した包含層からの出土だが、一部に東面回廊の基壇縁付近にある瓦溜や、南面回廊の基壇を南北に横断する暗渠埋土、および基壇外装の抜取痕跡などから出土した土器がある。これらの土器群は、東面回廊の基壇が削平を受けた時期を知るうえで重要である。本稿では、東面回廊で出土した鎌倉時代後半の土器群にくわえ、東面回廊外側の土器溜から出土した室町時代の土師器皿（図214）と、調査区西端のSK9966出土土器・陶磁器（図215）について述べる。

黄褐色土の土器 黄褐色土は東面回廊の外側にあって、瓦溜SX9954の検出面にあたる土層である。断割調査で一部を掘り下げたところ、少量の土師器が出土した（1～6）。土師器皿は一部に11世紀代の小片を含むが、多くは後述する瓦溜SX9954のそれと規格・器形が一致する。1～5は口径6～9cmの小皿、6は口径13cmの中皿。1・3は灰白色を呈し、3は口径8.4cmのいわゆる「ヘソ皿」である。これら以外はすべて褐色から橙色を呈し、胎土はやや砂質である。

基壇外装抜取溝の土器 東面回廊の基壇外装抜取溝SD9951B・9952Bからは、ごく少量の土器が出土している。多くは細片だが、土師器皿には口径7.5～10.0cmの小皿（7～11）と、口径15.0cmの大皿（12）とがあり、口径10.0cmの土師器碗もある。土師器皿の規格や器形は瓦溜の土器に似るが、一部に室町時代の土器を含む。

瓦溜の土器 東面回廊では基壇縁に沿って瓦溜があり、回廊外側のそれがSX9954、内側がSX9953である。出土土器はいずれも多量の瓦に混じていたもので、おもに土師器の細片からなる。SX9954の土器（13～26）とSX9953の土器（27～40・46～49）はほぼ同じ様相をみせる。すなわち、土師器皿が圧倒的に多く、瓦器や土師器土釜類がほとんどない。土師器皿には小皿、中皿、大皿の3種があり（13～40）、これに口径10.0～11.0cmの土師器碗（46～48）がくわわる。瓦器はきわめて少なく、小皿（49）と碗の小片があるにすぎない。なお、回廊外側の瓦溜では11世紀代の土師器皿や、15世紀代の土師器皿もわずかに出土している。

SD9944の土器 東面回廊の内側の雨落溝から続き、南面回廊の基壇を南北に貫くSD9944の埋土から出土した土器。この溝はもと暗渠であったが、基壇の削平がすすむなかで露出・埋没し、最終的には瓦溜SX9953で覆われている。したがって出土土器は、北円堂院回廊の基壇が削平を受けて以後、埋没に転じた時期を物語るが、その内容は前述の瓦溜出土土器と同じである。土師器皿（41～44、50～57）の構成も、上位層にあたる瓦溜のそれと同様で、小皿、中皿、大皿の3種からなる。土師器碗（47）と瓦器小皿（58）がこれにくわわるものの、その割合は著しく低い。これら以外には瓦器碗や高台付皿などもあるが、いずれも細片である。

瓦溜下層の土器 東面回廊内庭部の瓦溜SX9953下層から出土した土器も、おもに土師器皿からなる。59・60は土師器小皿で、口縁端部をわずかにつまみ上げるもの。61はいわゆるコースターで、口径10.0cm。62は中皿である。

以上の土器群は、小皿（口径7.5～10.0cm）、中皿（口径11.5～13.0cm）、大皿（口径14.0～17.0cm）の3種からなる土師器皿を中心とし、これに土師器碗（口径10.0～11.0cm）と、ごく少数の瓦器がくわわるという構成を示す。このうちの土師器小皿をみると、底部外面の中央部を凹ませるいわゆるヘソ皿（13～15、27～32など）は口径9.0cm未満に多く、底部が平坦・厚手で口縁部が短く立ち上がるもの（17～24、33～36など）は口径8.0～10.0cmに多い。両者は口径のレンジが重複しており、ヘソ皿のほうが小口径である。ヘソ皿は、底部が平坦で厚手の一群よりはやや時期が降る可能性がある。中皿（6・25・26・37・38・52～54）は、口縁部の下半でヨコナデの屈曲が著しく、口縁端部をわずかにつまみ上げるのが特徴で、色調は例外なく橙色である。大皿（39・40、55～57など）は口縁部に2段ヨコナデの痕跡をとどめ、口縁端部を面取りする個体がある。土師器碗（45～48）は暗褐色を呈するものが目立つ。瓦器は口径8cm前後で、内面見込みに粗いジグザグ状のヘラミガキを施す。

これらの土師器は、胎土がやや砂質で橙色ないしは褐色の一群と、胎土が精良で灰白色の一群からなり、前者が圧倒的に多い。前者は色相でいえば5YRから7.5YRの間にあり、胎土には金雲母や砂粒、クサリレキを含む。後者は径2mm前後のチャート礫を含み、色相は10YRから2.5Yが多い。

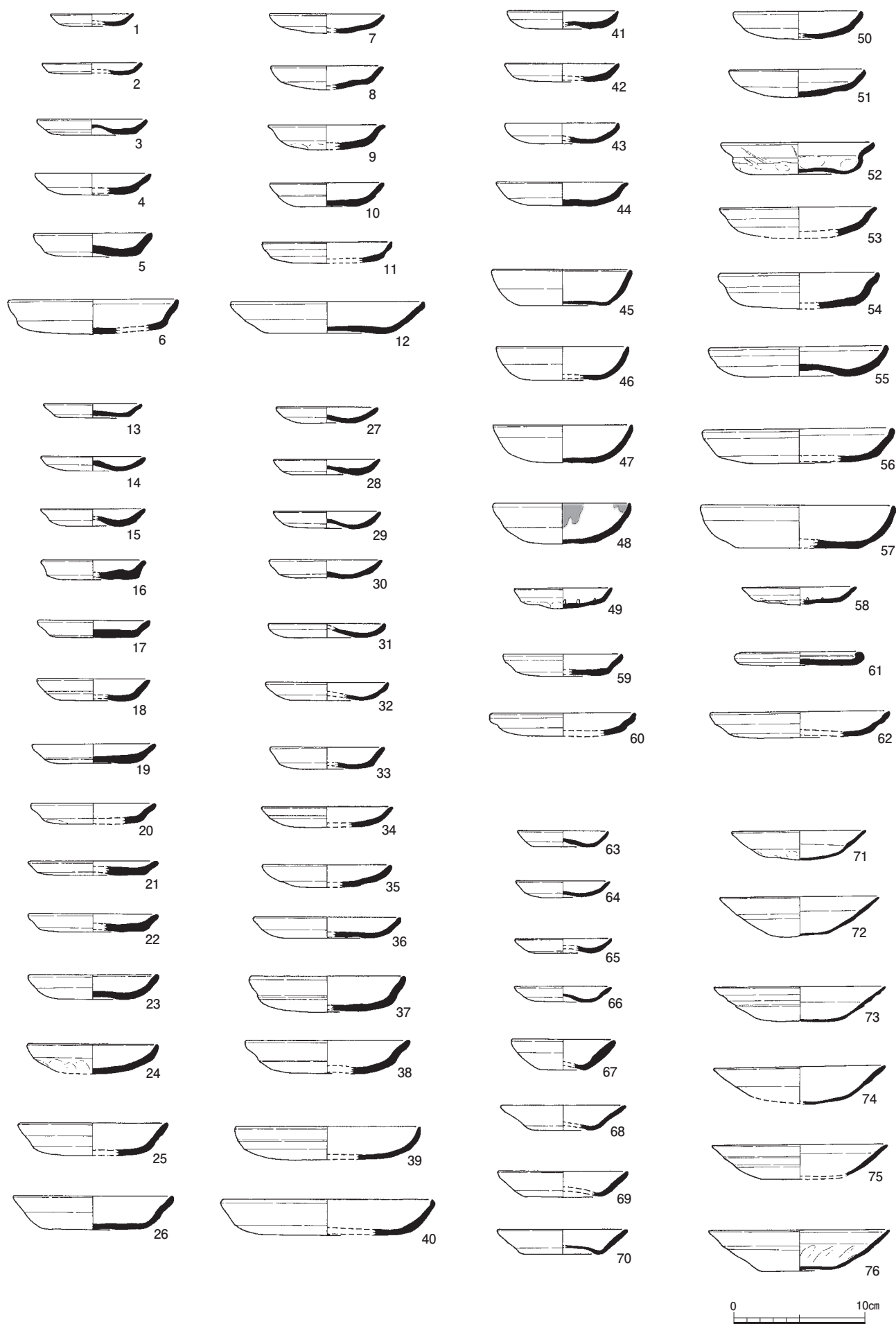


図214 東面回廊SC9950出土土器 1 : 4

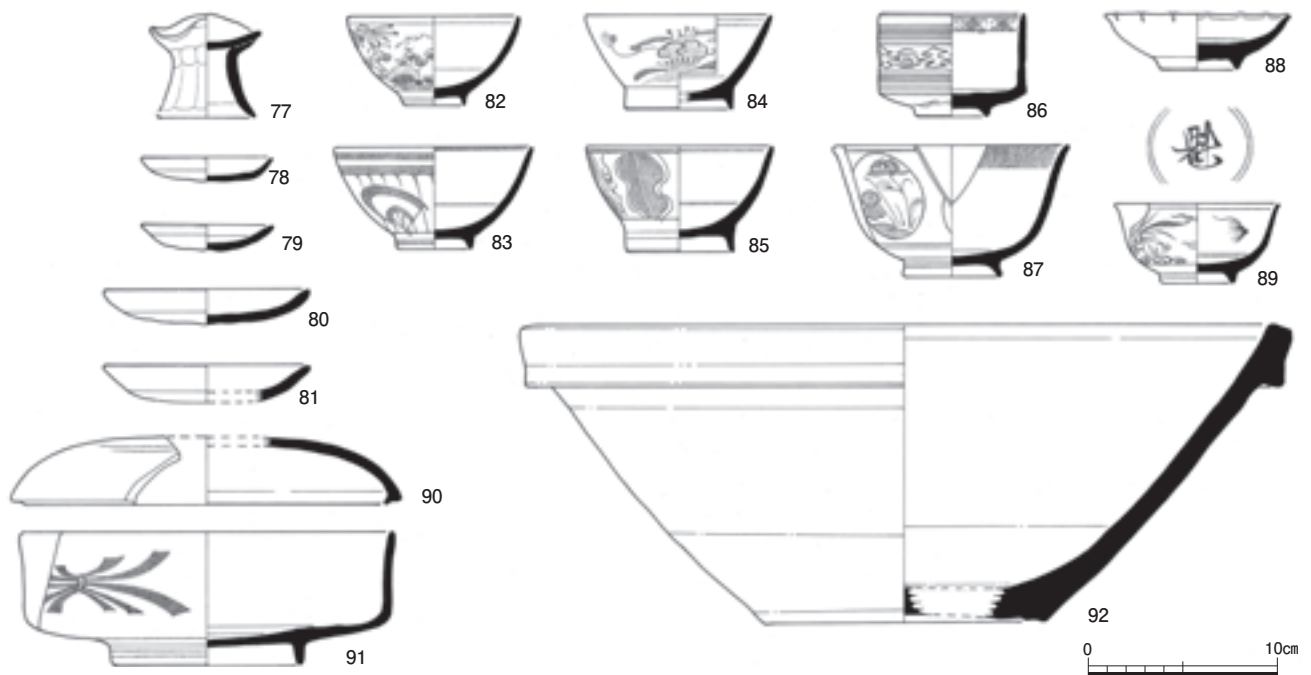


図215 土坑SK9966出土土器・陶磁器 1:4

こうした特徴の一致からみて、上記の土器群は13世紀後半から14世紀初頭のものが多いが、2段ヨコナデの土師器大皿などは12世紀後半から13世紀にかけてのものであろう。したがって、東面回廊SC9950の基壇縁付近に土器片を含む瓦溜が堆積し、開口した暗渠を埋めるなどしたのは、おおむね13世紀後半から14世紀初頭の出来事で、東面回廊の基壇が削平を受けたのはおよそこの時期か、それ以前のことといえる。

南面回廊SC9945は近世以降の削平・改変が著しいこともあり、内庭側の瓦溜SX9947の保存状態がかなり悪い。このため、土器の出土量が少なく検討に耐えないものの、土師器皿の器形および規格は、東面回廊出土のそれに一致する。南面回廊の瓦溜が堆積したのも東面回廊と同じく13世紀後半であろう。北面回廊内庭部の土器は調査面積が狭いため、出土量がきわめて少ない。

土器溜の土器 東面回廊の外側、回廊の東南隅付近で検出した土器溜SX9967からは、白色系の土師器皿が多数出土した。この土師器皿は、口径から小皿（口径6.0～8.5cm）、中皿（9.5～11.5cm）、大皿（12.5cm以上）の3種からなり、大皿は14.5cmを境にしてさらに2分できる可能性がある。小皿はいずれもいわゆる「ヘソ皿」である（63～66）。中皿（71）、大皿（72～76）は器壁が薄く、外方へと開く口縁部をもち、口縁部外面の中位付近にヨコナデによる圈線状の段差を残すものが多い。これらは灰白色のいわゆる「白土器」で、胎土は精良ながら径2mm前後のチャート礫を含んでいる。

SX9967付近からは、赤色系の土師器皿もわずかに出土している（67～70）。厳密に言えば、68・69は瓦溜SX9954からの出土である。このタイプの土師器皿は、

前記した瓦溜SX9954からも一部出土しているが、出土範囲は土器溜SX9967の周囲にほぼ限られる。67や70と合わせ、ほぼ同位置で上位にあるSX9967にもとは含まれていたものか。これらの口径は8.0～10.0cmで、外方へと開く口縁部と、やや上げ底状の底部とからなる。色調は橙色ないしは赤色で、胎土には砂粒を含む。

土器溜SX9967から出土した白色系の土師器皿は、類例の年代観を参考にするかぎり、15世紀前半に位置づけられる。また、赤色系の土師器皿は、厳密には土器溜からの出土ではないが、白色系の土師器皿とはほぼ同時期と考えられよう。土器溜SX9967が形成されるまでには、北門堂院の回廊跡や瓦溜は完全に埋没し、かつての東面回廊一帯は空地になったとみられる。

SK9966の土器・陶磁器 調査区西端の土坑SK9966からは、近世の土師器・陶磁器が出土した（図215）。土師器は「^{みみかわらけ}耳土器」と呼ぶ箸台（77）と、口径7cm台（78・79）、口径10cm台（80・81）の土師器皿がある。耳土器は口径約6cmの土師器皿の両端を内側へ折り曲げ、手捏ねで成形した台脚を取り付けたもの。土師器小皿には灯芯痕がある。

磁器には肥前系の染付碗（82～87）とその蓋、染付皿（88）、蓋付鉢（90・91）と色絵碗（89）、色絵鉢、青磁大皿があり、陶器はおもに京・信楽系の碗、皿、灯明皿、鍋、行平鍋や焼締陶器の鉢などである。このうち、磁器碗には丸形碗（82・83）、広東碗（84・85）、筒形碗（86）、端反碗（87）があり、18世紀末から19世紀前半に位置づけられる。陶器鍋は少なくとも2個体、行平鍋も2個体分あるが、細片が多い。焼締陶器の鉢（92）は5個体ある。いずれも口径が40cm前後で播り目を欠くが、内面の摩耗

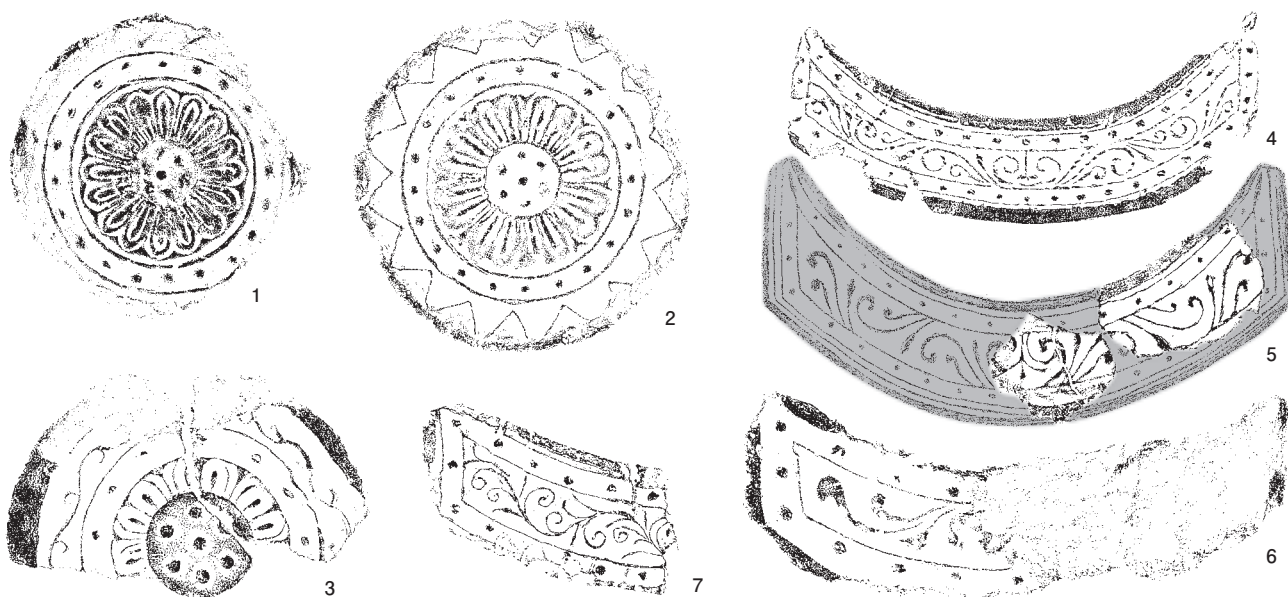


図216 SK9963出土軒瓦 1 : 4

が著しい。播鉢として使用したものとみられる。堺窯の
産品か。 (森川 実)

瓦 類

本調査で出土した瓦は3tをこえる膨大な量である。
現在整理中であり、全容を呈示することはできない。こ
こでは、土坑SK9963についてのみ報告する(図216)。

1の6304Bは1点出土した。興福寺では稀少な型式で
ある。2は6311Gで2点出土。6311の興福寺所用の種で
ある。1、2は奈良時代前半の瓦。3は外区に唐草文を
飾る軒丸瓦で、瓦当径が19cmをこえる大型品である。1
点出土した。『興福寺 第1期境内整備事業にともなう
発掘調査概報Ⅰ』第21図の6と同範で、10世紀ごろの瓦
であろう。

4の6682Dは8点出土している。段部の浅い段顎をも
ち、凸面は縦位の縄タタキ、凹面の瓦当よりはヨコナデ
を施す。6682の興福寺所用の種である。5の6694Aはお
そらく1個体であろう。4、5は奈良時代前半の瓦であ
る。6は簡略化した大ぶりの唐草文を飾る。1点出土し
た。顎面をもつ曲線顎で、凸面はタテケズリを施す。『興
福寺食堂発掘調査報告』の軒平瓦型式30と同範であらう。
7は唐草文がすべて連続しており、非対称である。1点
出土した。『興福寺防災施設工事・発掘調査報告書』の
126と同範であろう。6、7は9世紀の瓦である。

このほか、細片だが軒丸瓦2点、軒平瓦が6点出土し
た。いずれも奈良、平安時代の瓦である。

土坑から出土した丸瓦の総量は187kg、平瓦の総量は
427kgである。このうち、あきらかに中世以降とわかる
資料は出土していない。軒瓦や丸瓦、平瓦の状況から、

この土坑は、永承年間あるいは治承年間の火災後に形成
された瓦の廃棄土坑である可能性が高いといえよう。軒
瓦の年代観からすると、永承火災時の廃棄物とも考えら
れるが、今回は土坑の一部しか調査していないので、断
定は控え、現段階での可能性を指摘するにとどめておき
たい。 (今井晃樹)

金属製品・銭貨

銅製品は飾金具1点のほか、柄金具などが出土した。
鉄製品は、釘や鋸などが多数ある。その多くは、表土直
下の盛土内か、近現代の土坑からの出土である。ただし、
角釘も出土しており、古い時期のものも含まれる。銭貨
は康熙通宝1点、寛永通宝10点などがあり、いずれも表
土か盛土内からの出土である。

図217は円形の飾金具。断片で全体形が不明であるが、
外縁を含む意匠の一部が残存する。外縁と内区との間に
はD字形の透かしがある。寸法は、長さ5.2cm、幅4.0cm、
厚さ2.6cmである。淡茶色土出土。 (芝康次郎)

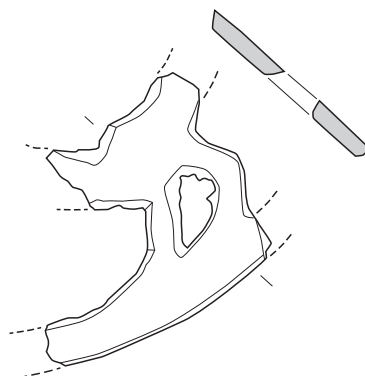


図217 第483次出土金属製品 2 : 3

5 まとめ

北円堂院回廊の規模 今回の調査では、北円堂を囲う回廊の遺構を検出し、その規模をあきらかにした。北円堂院回廊の規模については『興福寺流記』や『諸寺縁起集』などに記載されている。今回の調査では、南北147尺、東西150尺となり、『興福寺流記』に記されている寸法と一致した。南面回廊については、本調査では南門の柱痕跡を確認できなかったが、『興福寺流記』では南門左右の回廊の長さを62尺としており、記述通りだとすると南門の桁行全長は26尺となる。また、南門の基壇規模が東西37尺、南北27尺になることと合わせると、南門は桁行3間、梁行2間であったと考えられる。

いっぽう、東面回廊ではほぼすべての礎石の痕跡を検出したが、門の存在を示す遺構は確認できなかった。『興福寺流記』や『中右記』などには「在門六口」「東中門」「南中門」などの記述があり、各面に門を開いていた可能性がある。しかし、東面回廊の柱間間隔は多少のばらつきがあるもののほぼ一定で、他より柱間寸法があきらかに広いと認められるところはない。また、基壇地覆石が通り、北面回廊で確認したような階段の痕跡も確認できなかった。したがって、東面に開く門は回廊と柱間寸法が等しく、かつ階段をともなわない形式であったと考えなければならない。

回廊の柱間寸法は、梁行が11尺となり『興福寺流記』と一致する。しかし桁行は、全長が147尺なので、両端を除いた125尺を12間で割り付けることとなり、整数値は採り得ない。各柱間を等間で割り付けたと考えると、1間は10.3尺程度となる。なお、一定の区間を等間で割り付ける例は興福寺中金堂院回廊でもみられる。

また、南面回廊の柱の割り付けも同様に解釈することができる。南面回廊は史料より隅から南門までの距離が62尺であり、隅の1間分（11尺）を引いた51尺を柱間5間で割り付けたとすると、1間の柱間寸法は10.2尺となり、検出した柱痕跡とも齟齬はない。

最後に北面回廊である。北面回廊では階段地覆を検出しており、地覆石の心々間距離は3.9m（13尺）となる。階段幅がそのまま門の柱間寸法を示すと考え、これを東西長150尺より引き、両隅の2間分（22尺）を引いた115尺を12間分とすると、1間は9.6尺となる。

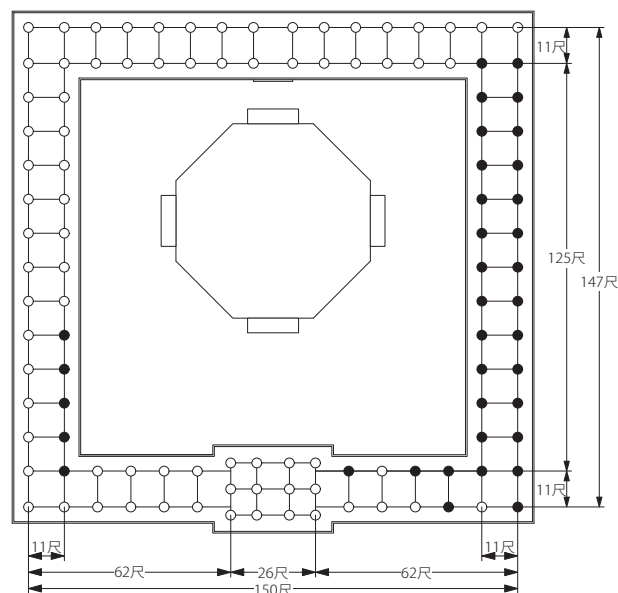


図218 北円堂院模式図

なお、北面回廊では羽目石も検出しており、東石のない壇上積基壇で葛石の成はほぼ地覆石の成と等しいと考ええると、基壇の高さは約50cmに復原できる。

北円堂院回廊の変遷と廃絶 今回の調査では、回廊の改修痕跡を検出し、改修前を奈良時代創建当初、改修後を永承火災後の再建の遺構と考えた。その後の改修痕跡は認められなかったため、治承焼討後に回廊を造営したかどうかは遺構からは確認できなかった。地覆石の周囲に焼土層SX9960と炭化物があり、なおかつこれが地覆石の内側でも検出されている。これが火災によるものだとすると、この時にはすでに羽目石以上の基壇土が失われていたこととなる。また、地覆石の抜取溝はこの焼土層SX9960を掘り込み、その上を覆う瓦溜には、鎌倉時代の軒瓦が多量に含まれている。この瓦溜は、回廊に沿って帯状に分布するため、回廊に使用されていた瓦が落下したものであると解釈するのが自然である。しかし、SX9960が治承焼討時の火災を示すものだとすると、火災の前にすでに基壇外装は失われており、その後新たに基壇を作り直した痕跡はないことから、仮に再々建時に回廊もあわせて造営したとしても、回廊基壇は外装のない土壇状のものであったことになる。また、瓦溜に含まれる土器の年代観より、瓦の堆積は13世紀後半から14世紀初頭とみられ、再々建の後わずか数十年で回廊が廃絶したことになってしまう。

回廊の再々建の有無に関しては、瓦溜に含まれる瓦の整理と、焼土層SX9960およびそれにともなう炭化物の分析調査を待ち再度検討する予定である。いっぽう、回廊基壇は、回廊再々建の有無にかかわらず、13世紀後半から14世紀初頭までには削平されていたことがあきらかとなった。

(大林)